

参考資料 6

分類名〔病害虫〕

「東北211号」の葉いもちほ場抵抗性

宮城県古川農業試験場

1 取り上げた理由

「東北211号」は収量性及び耐冷性、耐倒伏性に優れ、平成26年4月に飼料用米向けの知事特認品種として認定され県内に普及している。一方、いもち病真性抵抗性は*Pib*を持つものと推定されることからいもち病ほ場抵抗性については未検定である。今回、葉いもちほ場抵抗性について既知の品種の発病程度と比較することにより、ほ場抵抗性を推察したので参考資料とする。

2 参考資料

- 1) 3か年の試験で葉いもちほ場抵抗性が“弱”（平成27年度），“弱”（平成28年度），“やや弱”（平成29年度）となり総合判定として“弱”と判定した（表1, 図1）。
- 2) 「東北211号」のいもち病真性抵抗性は*Pib*であり、現在のところ本県には*Pib*にり病するレースはほとんどいないと考えられるが、今後、本品種や他の*Pib*を持つ品種の作付け面積が増加した場合、り病可能レースの出現する可能性が高まることから、「東北211号」については、箱施用剤もしくは水面施用剤による葉いもち防除を行う必要がある。

3 利活用の留意点

- 1) 試験は平成27年から29年にかけて古川農試場内ほ場において畑晩播法で行った。
- 2) 発病の程度を比較するため、「ふくひびき」（*Pib*: やや強）, 「ササニシキ」（*Pia*: やや弱）, 「イナバワセ」（*Pii*: 弱）, 「ひとめぼれ」（*Pii*: やや弱）, 「まなむすめ」（*Pii*: 中）等を供試し、畑晩播法により評価を行った。
- 3) 発病を促進させるため試験区にいもち病菌（007.2レース）を噴霧接種し、スプリンクラー散水による発病促進を行った。

（問い合わせ先：宮城県古川農業試験場作物保護部 電話0229-26-5108）

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

耐冷性やいもち病抵抗性を強化した東北オリジナル業務・加工用多収品種の開発(2014~2018)

2) 参考データ

以下のとおり。

表1 平成27~29年における畑晩播法での発病程度および判定結果

品種	真性 抵抗性	ほ場 抵抗性	H27		H28		H29			総合判定
			A区	B区	A区	B区	A区	B区	C区	
東北211号	<i>Pib</i>		弱	弱	弱	弱	やや弱	やや弱	中	弱
ふくひびき	<i>Pib</i>	(やや強)	中	中	やや強	やや強	中	やや強	強	中~やや強
イナバワセ	<i>Pij</i>	弱	やや強	強	やや弱	弱	弱	弱	弱	弱
ひとめぼれ	<i>Pij</i>	やや弱	やや弱	やや弱	やや弱	弱	やや弱	やや弱	弱	やや弱
ササニシキ	<i>Pia</i>	やや弱	やや弱	やや弱	弱	やや弱	やや強	やや強	やや弱	やや弱
まなむすめ	<i>Pij</i>	中	やや強	やや強	中	やや強	中	やや強	中	中~やや強
はたじるし	<i>Pij</i>	やや強	-	強	強	強	強	強	強	強

※網かけ部は真性抵抗性遺伝子*Pia*,*i*を持つもの。

イナバワセ~はたじるしのほ場抵抗性は*Pia*, *Pij*における基準品種としての評価。ふくひびきは特性表のもの。

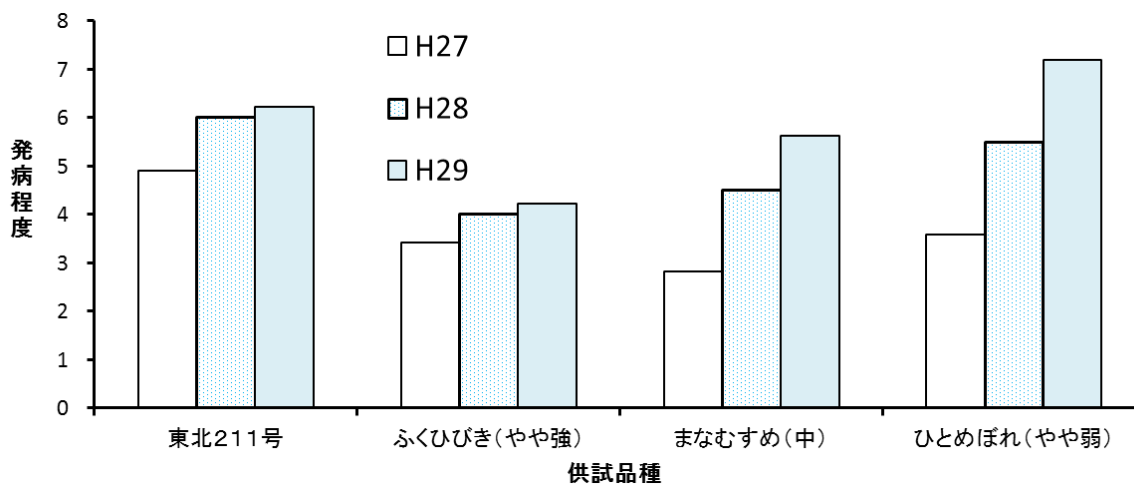


図1 供試品種の発病程度 (供試品種の () 内は基準品種における抵抗性)

葉いもち抵抗性検定試験調査基準

発病程度	発病状況の概要	病斑面積率(%)
0	S型病斑が全く認められない	0
1	S型病斑がわずかに認められる(微)	1
2	S型病斑が一見して認められる(少)	2
3	S型病斑が中程度に認められる(中)	5
4	S型病斑が多く認められる(多)	10
5	S型病斑が甚だしいか或いは 枯死葉がわずかに認められる	20
6	枯死葉が一見して認められる	40
7	枯死葉が中程度認められる	60
8	枯死葉が多く認められる	80
9	全葉ほとんど枯死	90
10	全茎葉枯死	100

3) 発表論文等

a 関連する普及に移す技術

なし

b その他

なし

c 引用した文献など

なし

4) 共同研究機関

なし